

## 藤山一雄『新博物館態勢』を読む

犬塚 康博

### 1 はじめに

『新博物館態勢』は、康德7年（1940）に刊行された、満洲国国立中央博物館副館長藤山一雄の著書である。博物館を主題にすえた日本人による図書としては、浜田青陵の『博物館』〔浜田 1929〕、棚橋源太郎の『眼に訴へる教育機関』〔棚橋 1930〕、後藤守一の『欧米博物館の施設』〔後藤 1931〕などに続くものであり、満洲国でははじめてであった。しかし、1945年の日本敗戦と満洲国滅亡とにより、本書の寿命はいったん途絶える。戦後、木場一夫の『新しい博物館 その機能と教育活動』〔木場 1949〕や日本博物館協会の『博物館学入門』〔日本博物館協会 1956〕が文献リスト中に本書の書誌を記したが、内容におよんで参照することはなかった。

そして、伊藤寿朗の「日本博物館発達史」〔伊藤 1978〕が本書に言及する。さらに、同じ伊藤の監修による『博物館基本文献集』中の1冊〔藤山 1990〕として復刻され、刊行後半世紀ぶりに再読がうながされることになった。書名を冠した1995年の名古屋市博物館特別展「新博物館態勢 満洲国の博物館が戦後日本に伝えていること」をピークに藤山一雄の再評価が継起し、2006年開催の梅光学院135周年記念・第11回企画展「梅光女学院と藤山一雄—その人と生涯をみつめて—」にいたっている。

1990年以降しばらくは、藤山一雄の博物館理論の全体把握が急がれたこともあり、本書のほか藤山の諸論考から片言隻句を抽出する作業がおこなわれてきた。この方法は誤りでなかったが、『新博物館態勢』そのものの解析も切望されており、今回機会を得てこれをおこなうものである。作業にあたっては、満洲国の藤山一雄にとって、本書で紹介した博物館にあらわれていたことは何か。そして藤山にとっての「何か」は、ただいまの私たちにとって何なのか、に止目しながら進めることにしたい。<sup>注</sup>

### 2 『新博物館態勢』の前提

「序」の冒頭から、藤山一雄は批判的である。

世界に現存してゐる多くの博物館が如何なる沿革を持ち、如何なる現状で、さうして如何に経営せられて居るかは、博物館に従事するものや、博物館に多少でも興味を持つて居るものの等しく知らんと欲するところであるが、此の種の文献中、専門的なものはいざ知らず、一般への常識的食料になるやうなものは案外に配膳されてゐない。〔藤山 1940c : 1〕

本書はまず、主題が「博物館に従事するものや、博物館に多少でも興味を持つて居るも

の」にとってあることを書きつける。「博物館に従事するもの」とは著者たる藤山一雄その人であり、「博物館に多少でも興味を持つて居るもの」とは延長された藤山一雄と言うことができるだろう。さらにそれは、「一般」にまで拡張されて、一般読者を一気に藤山との共犯関係に誘う。本書の構えはここにある。藤山一雄が読者を連れ立って批判するのは、専門書（「此の種の文献中、専門的なもの」）以外の一般書（「常識的食料になるやうなもの」）が、「世界に現存してゐる多くの博物館が如何なる沿革を持ち、如何なる現状で、さうして如何に経営せられて居るか」の問いを持たず、答えもないことに対してである。果たして、この設問と回答が一般の常識に必要とされていたのか否かは不明だが、藤山はここからはじめる。

『新博物館態勢』は全14章から成り立つ（表）。「皿に載せた博物館は凡て筆者が一度は馴染んだものである」と言うように、少なくとも章立てされた博物館は藤山の実見したものである。これらについて、「あるものは、どうして博物館が出来たかといふことを、あるものはどんなものが列べられてあるかといふことを、また、あるものはどんな仕組に出来てゐるか、どんな方法で展示されてゐるかといふこと」[藤山 1940c : 2] に即して記述され、これにて冒頭の設問と回答を本書がになう旨表明される。

そしてこの書の読了により、「私の博物館といふものが大体どんなものであるかを自ら味読せられるだらう」と藤山は書く。「私の博物館」とは何か。博物館の一般論が語られるのではない。藤山一雄の博物館なのである。本書の広告は次のように書く。

本書は著者の理想する博物館をかつて訪問せる多くの世界博物館中より最も印象深きものを拉し来り、あるものは浪漫的に、あるものは沿革的に、あるものは構造的に、あるものは列品より、またあるものはスペースの分配等より観察し、通読綜合すればそこに筆者の夢が自ら幻影の如く浮び出づる特殊なる記述法により新体制下に必要する博物館及びその活動の進路を暗示するものでかゝる表現の方法をとれる記録は稀有のものである。然も著者は多くの博物館を藉り来り、実は自らの世界観と文明的要素を盛れる自己の生活の帰趨を暗示せるもので、一つの芸術的創造なりといつてよい。博物館の仕事に従事せるものは勿論大方の読者の一覽を希望する。[執筆者不明 1940]

文体から推して、藤山自身による広告文であろう。『新博物館態勢』は、藤山の「理想する博物館」、藤山の「夢」を描くものであることが端的に語られている。それがそのまま「新体制下に必要する博物館及びその活動の進路を暗示するもの」となるところは、序の「博物館に従事するものや、博物館に多少でも興味を持つて居るもの」すなわち「一般」となる展開と通じ合う。しかも藤山「自らの世界観と文明的要素を盛れる自己の生活の帰趨を暗示せるもので、一つの芸術的創造なりといつてよい」とまで言う。本書は、彼の生活と芸術とを総合するものなのである。

なお、「此の労作は休暇帰家中の長男光太郎、次男雄治郎の助力によつた」〔藤山 1940c : 2〕とあるのは、外国語文献の翻訳などを手伝ったことの意である旨、両氏より教示を得ている。

さて、表1に明らかなように、本書の章立て、節立ては整然としていない。混乱も認められる。いくつかの理由が考えられるが、藤山の著作活動を考慮した際、この書が書き下ろしなのか、既発表稿の集成なのか、両者の混成なのか判然としないことも手伝っている。いずれの場合も想定しながら検討を進めてゆこう。

### 3 『新博物館態勢』の内容

第1章の「博物館について」が総論、第14章の「結語」が結論である。これまで私たちは、満洲国の博物館と藤山一雄の博物館論の実態把握を急いだこともあり、他章に比してこのふたつの章を真っ先に読み込んできた経緯をもつ。そうした喫緊の要請がひとまずなくなった今回は、第2章から第13章までの個別の博物館紹介から読みはじめる。これらは、対象となる博物館と著者との関係の異同によって、大きく二分することができる。

1) 第2章～第10章：藤山一雄が当事主体とはならない博物館

2) 第11章～第13章：藤山一雄が当事主体となる博物館

あらかじめ言えば、1)の9館は、2)から参照されている項である。9館の諸特徴を体系的に総合する博物館として、藤山が当事主体となる満洲国の博物館が構想される関係にある。

ここでもまた、私たちの過去の関心は2)の一群に集中的に注がれ、1)を周辺的にしてきた。よって、まず1)について、藤山が示唆した「如何なる沿革を持ち、如何なる現状で、さうして如何に経営せられて居るか」、および「あるものは、どうして博物館が出来たかといふことを、あるものはどんなものが列べられてあるかといふことを、また、あるものはどんな仕組に出来てゐるか、どんな方法で展示されてゐるかといふこと」〔藤山 1940c : 2〕、さらに「あるものは浪漫的に、あるものは沿革的に、あるものは構造的に、あるものは列品より、またあるものはスペースの分配等より」〔執筆者不明 1940〕を念頭におきながら、藤山が紹介する主旨、つまりそれらの博物館を介して藤山にとってあらわれていることがらが何であるのかを見てゆきたい。

#### 3-1 藤山一雄が当事主体とはならない博物館

##### 「第二章 ゲーテ博物館」

「年来の宿願であつたゲーテ博物館を訪ねるために、大まわりしてワイマールの町に下車した」〔藤山 1940c : 21〕と藤山一雄は書く。以下、ゲーテの事績とゲーテ博物館の説明が続き、章末にいたって博物館研究的記述がおこなわれる。

そして国家がかゝる由緒ある私宅をナショナル、ミュージアムとなせる所以もまことに意義あることで、殊にその内容がゲーテの世界を象徴し、芸術、科学のあらゆる分

野に互れるに於て、「世界博物館」の本来を象徴して余りありといつても過言でないと信ずる。〔藤山 1940c : 40〕

括弧でくくった「世界博物館」の語は、藤山には稀である。この用法によるこの語は、藤山の他の著作には登場しない。ゲーテに対する、藤山の最大級の献辞とみなすこともできよう。「芸術、科学のあらゆる分野に互れる」ことが、本章における藤山の眼目である。

### 「第三章 ベルリン国立民俗博物館」

本章は、ベルリンの中心にある「博物館の島」の数館について略記した後、「然し最も私の興味を引いたもの」〔藤山 1940c : 41〕としてポツダム広場近くの民俗博物館を掲げる。これ以外に藤山の感想は記されず、「いかなるものを列べて居るかを記述する」〔藤山 1940c : 42〕として、展示室ごとに展示資料を列記する。「あるものはどんなものが列べられてあるか」や「列品より」に対応するものと思われるが、行文からは、藤山の興味をひいた理由や満洲国国立中央博物館への参照項目を直接うかがい知ることはできない。

### 「第四章 北方博物館」

この章も、ベルリン国立民俗博物館同様、展示室ごとに展示資料が記述され、「あるものはどんなものが列べられてあるか」および「列品より」のケースに該当すると思われる。ただし、北方博物館の方が筆致流麗である。「これらの歴史的記念物は文明の潮におし流され、とつくの昔に何処かに失はれたゝめに、何処の国に於ても、こゝ程完全に、中世の文化や昔の民俗を保存してゐるところは見あたら無い」〔藤山 1940c : 58〕という藤山の評価が、この記述の背景にあるようだ。さらに、この博物館をつくったアルツール・ハツェリウスの事績に対して「不屈の努力」として触れていることから、「如何なる沿革」および「どうして博物館が出来たかといふこと」も含まれているとみなせる。

なお先取りして言うと、後の「日本民芸館」の章で北方博物館に関する記述が登場するが、これに接続させて藤山はこの章を設けたのかもしれない。

昭和四年の夏、柳氏浜田氏等は偶然、北欧の旅に出で、ストックホルム市スカンセン丘上に落ち会ひ、「北方博物館」にドクトル・ハゼリウスノルヂスカムゼーの尨大な農民美術品の大コレクションを覬、北方民族のもつ工芸美から強き刺戟を享け、「日本民芸館」発芽の種を蒔かせられるに至つた。〔藤山 1940c : 92〕

### 「第五章 慶州博物館」

書き出しから藤山は、この博物館に関する自己の意見を披露する。

慶州博物館は正式に言へば「朝鮮総督府博物館慶州分館」であるが、新羅文化の本

質を広く展示する役目をもつ郷土博物館としては、「新羅博物館」といふのが一番響がよく、また本質的でもあると思ふ。〔藤山 1940c : 75〕

ここには、慶州博物館の「本質」なるものを実体視する藤山の姿があらわれている。「ほんとを言へば」として続く次の段落も同様に、慶州博物館には藤山の「本質」や「ほんと」がある。「ほんとを言へば今日の慶州の町及びそれを囲繞する東西約八キロ、南北一〇キロに亙る盆地の風物悉くが大きな「露天博物館」である」〔藤山 1940c : 75〕と続き、藤山の「ほんと」が「露天博物館」へと連なっていることは重要である。さらに、この博物館の前庭を「「露天展示場」の意義を有して居る」〔藤山 1940c : 76〕とも評価する。「露天」がキーワードである。

慶州博物館については、「新博物館の胎動」で「私の好きな博物館の一つでありましてストックホルムのスカンセン（土俗博物館）を思はせ」、「実地に一巡すれば慶州を中心とする環境が博物館そのものであると感じさせ」〔藤山 1940a : 4-5〕とその印象を端的に記しており、これの参照をもって「露天」がスカンセンに通じるものとしてあることの理解にいたる。章頭とともに、「この博物館はかゝる市街のうちに経営しないでむしろ、月城址内とか、鮑石亭址の如き広闊にして史実に富める地に創設せられたなら尚意義深く、郷土博物館として一層その本領を発揮するであらう」〔藤山 1940c : 83〕とし、「切に総督府当局にスケールの大きな移築と拡張とを希望してやまない」〔藤山 1940c : 83〕とする結語まで、藤山の主旨は一貫している。

なお、本書中唯一の自筆スケッチが、この章の挿図に用いられている。絵は、主たる展示館ではなく、「朝鮮建築の美に衝かれた」〔藤山 1940c : 83〕という「館長室の脇なる応接室」〔藤山 1940c : 82〕であり、藤山のディレクタントイズムと非中心主義があらわれている。これもあわせて、慶州博物館に対する藤山の並々ならぬ思い入れが感じられるのである。

## 「第六章 日本民芸館」

この章は、第1節が概要、第2節が使命、第3節が沿革、第4節が展示見学の印象、第5節が展示方法と、日本民芸館について満遍なく記述される。いずれかに重点があるという印象はないが、『日本民芸美術館設立趣意書』にはじまる民芸運動と、民芸館設立にいたる経緯の記述にあてられた沿革が他のページ数に比してやや多いことから、冒頭の「如何なる沿革を持ち」や「どうして博物館が出来たかといふこと」および「沿革的に」に藤山の主旨があったのかもしれない。

それにしても本章での藤山は、展示品について「全く動かすことの出来ない美しさを如実に見出す」〔藤山 1940c : 93〕と言い、「私は「民芸」にいそしまれる人達の幸福を羨むと共に、一段の努力と前途の発展を祈りたい」〔藤山 1940c : 96〕とし、「民芸館の展示方法については殆んど間然とするところはない」〔藤山 1940c : 96〕と賛辞を惜しまな

い。主題は「美」にある。それにまつわる「民芸にいそしむ人達の慧智と美の判断」〔藤山 1940c : 95〕を指摘し、「在来の多くの美術館は時々美的価値よりも、その由緒を重じ、在銘に囚はれ、或は技巧にこだはり、種類に滞り、却つて醜なるものさへ並べられ、美的統一を失ふ場合もまゝある」〔藤山 1940c : 88〕という博物館研究的批判をもおこなう。「美の評価は」「理論により組立てず、むしろ直感に基いて求める」〔藤山 1940c : 88〕と藤山が言うからには、本章は総じて藤山の「直感」の記述となろう。この日本民芸館の見学についても、「新博物館の胎動」は、「列品が建物や部屋その光線、即ち環境との関係をよく考慮し、配列してありまして、民芸品の本質、その美しさに索きつけられました」〔藤山 1940a : 4〕と直截に記している。

### 「第七章 エジプト博物館」

現在のエジプト考古学博物館のことである。この章は、他の8章と比べて様相を異にする。1929年の洋行の折藤山が、日にちを違え2度にわたりこの博物館を見学したのは、「その内容のチャーミングが大きかつた」〔藤山 1940c : 99〕からだという。行文中繰り返し登場する語句が、このことを物語っている。煩を厭わず、以下に引用する。文中の下線は引用者による。

殊に注意すべきはこれらの生命なき発掘品を見、古代の天文、暦数、医薬等の諸科学の率直端的にして、規模雄大、然も健康、積極的になると同時に伝統的確信による実在世界の時間、空間のスケールの法外に雄大なるに驚嘆させられるのである。〔藤山 1940c : 102〕

例へば「ラノフェルの像」や「村長像」の如き、驚くべき自由さを以つて、当時の生活と文化とを如実に見せて居る。〔藤山 1940c : 104〕

当時既にかゝる大物（ペピ一世像のこと―引用者注）の鋳物術も知られてゐたのかと驚異の眼を瞠つたことである。〔藤山 1940c : 104-5〕

数千年前にかゝる技法（絵画の技法のこと―引用者注）を体得せし慧智に到りては全く一驚するの外はない。〔藤山 1940c : 107〕

中でも王（ツタンカーメンのこと―引用者注）のミイラの顔面を蔽つた黄金の冠や、黄金棺等はその豪華さに驚かされる。〔藤山 1940c : 108〕

その（ツタンカーメンの玉座の王と王妃像のこと―引用者注）上に太陽が輝き上部はテル・エルアマルナ式の文様を装飾し、その巧緻なること驚くの外ない。〔藤山 1940c :

またエナメルの色釉も見られ第一王朝の焼物の小断片に象形文字を凹刻し、これに堇、緑の二色のエナメルを嵌入してゐるのには驚くの外はなかつた。〔藤山 1940c : 110〕

展示品の細部におよんで藤山の知識が動員され、その想像力も発揮されて、驚嘆が連続する。このほかにも、「思はず頭が下がるものがある」〔藤山 1940c : 104〕、「頗る印象的である」〔藤山 1940c : 104〕、「忘れ難き印象を得たもの」〔藤山 1940c : 105〕、「心を牽かされる」〔藤山 1940c : 106〕等々多様な形容が続く。展示品に接し手放しで驚喜する藤山があらわれており、他の章には見られない様子である。

### 「第八章 シェークスピア博物館」

「さて私はくだ〜と、此の天才の誕生地の思出を書並べた」〔藤山 1940c : 124〕と章末で記すように、この章は随筆的であり、藤山の筆勢は自由奔放である。本書全体で三つある折り込み図版のうちのひとつ“STRATFORD-UPON-AVON IN THE TIME OF SHAKESPEARE”が挿入されているのは、「広義には、このストラトホード・オン・アボンの町自体が「シェークスピア博物館」だといつてよいほど、その悉くの風物が彼の息のかゝらないものはない」〔藤山 1940c : 114〕とすることに対応してのことであろう。慶州博物館での「露天博物館」に通じている。

シェークスピア博物館も、ゲーテ博物館同様「英雄偉人の一生を偲ぶ資料を展示せる特殊博物館」〔藤山 1940c : 4〕だが、これを紹介した主旨は次のとおりである。

一体にイギリスといふ国自体極めて伝統を重んずる保守的な国柄で、流行などに余り支配されず、道具でも建築でも習慣でも乃至人間そのものさへ、古きもの、老へるものを大切にし、尊重して、それらの黴の生えし如きもののうちに潜む魂といふか、生命といふか、過去の民族や国民生活の表現に、自己の今日ある所以と同様のものを発見し、共鳴し、その一貫せる精神に鼓舞せられ、刺戟せられ、次代の歴史を更に壮重に創り出す原動力を認めるよすがにするのである。アングロサクソン全体ががっかりと落ちつき、また強靱にして、底力ある性格を持続し、世界に逼り来るその力にはなんとしても感心せねばならぬ。シェークスピア博物館は誠に小なる住宅であり、その列品とても、眼をそばだてる如きものは一つもないが、後方より前方へ継続するアングロサクソンの強き一連鎖たる此の天才の生涯に、あふるゝ熱情を保管する後継者の心づくしに頭を下げねばならぬ。〔藤山 1940c : 124-5〕

ここには、藤山一雄にとってシェークスピア博物館としてあらわれていることは何か、がよくあらわれている。列品への言及は、前章エジプト考古博物館のそれに対する驚嘆に

比べると雲泥の差がある。それでもなおシェークスピア博物館をとりあげたのは、そのイギリス観の当否は別としても、それを介した満洲国のあるべき姿の呈示といえる。かくして、「われらの国にも、鄭孝胥博物館があつてよく、羅振玉博物館がなければならぬのである」〔藤山 1940c : 125〕と結ぶ。

## 「第九章 フランスの国立博物館」

本章は、フランスの博物館の制度・運動について、淡々と記述されている。藤山の感想や評価が挿入されることはない。単一の章としては、ページ数が最も少なく、挿図もない。

## 「第一〇章 北米合衆国国立博物館」

この章は、スミソニアン協会と国立自然史博物館を紹介する。要点の第一は、「スミソニアン学会こそ、私の理想とする、近代博物館の構成と、その活動を最も有意義に具顕して居り、これらの博物館は、スミソニアン学会なる大博物館の一部分をなす資料展示場に過ぎない」〔藤山 1940c : 135-6〕にある。展示中心の博物館からの脱却が、スミソニアン協会の例示でもって主張される。

第二は、1911年に竣工した自然史博物館の建築に注目して、「世界の大博物館としては旧いものでは英の大英博物館、新しいものでは、独のミュンヘン市なる独逸博物館等があるが、そのエレベーションの清美、雄大にして、その構成の近代的完璧さに於て、此の博物館に比肩するものは多くあるまい」〔藤山 1940c : 144〕と評し、「本館の構造は相当金がかゝつてゐるが、所謂記念堂乃至殿堂式といふよりも、博物館の機能を發揮せしめる実用に重きを置き、内部には些の虚飾なく、蒐集品安全の為めの耐火、耐震には勿論、塵埃、雑音及び泥棒の難を防ぐ堅確なる装置が施され、非常に清楚な感を与へる」〔藤山 1940c : 146〕と、その合理的、機能的な博物館建築を賞賛しており、藤山にとっての博物館建築の「近代」を知ることができる。同館の照明に記述を費やすのは日本民芸館に類するものがあり、展示品の「美」、その「近代」を考慮していたためであろう。「本館建築の利用配置を種々の方面より観察し、科学博物館建設プランの参考に資しよう」〔藤山 1940c : 148〕と立面図、平面図の折り込み図版まで挿入して、満洲国国立中央博物館の建物設計の参考にする態度を単刀直入に示す。

以上、第2章から第10章まで、藤山一雄が当事主体ではない博物館に関する記述を概観した。藤山一雄の「私の博物館」はこれらと反照関係にあるはずだが、ここからその全体像を体系的かつ直截に読み取ることはまだできない。先を急ごう。

### 3-2 藤山一雄が当事主体となる博物館

次に、藤山一雄が当事主体となる満洲国の博物館について書かれた第11・12・13章をながめる。



## 「第十一章 国立中央博物館大経路展示場」

3節に別れたこの章は、おおむね第1節が沿革、第2節が展示場の構成、第3節が展示構成に該当する。沿革の節には、否定的な言辞が多い。展示場の狭隘さ、立地の不利、交通アクセスの不在に対するもので、「これは建国後七年にして尚且つ満洲国文化水準のかくも低かりしことを偽らず表示せるもので、他日のために記録して置くこともあながち無意義ではないと思ふ」〔藤山 1940c : 164〕と厭味をいう。展示場の構成は、そうした悪条件下にありながらも展示ケースを設計・発注し、種々の工夫を凝らして「兎に角く予定の如く、七月十五日をトし開場することを得たのはまことに欣快にたへない」〔藤山 1940c : 165〕と自賛する。展示資料を単調に記述した後、次のように総括する。

これを要するに本展示場は地方都市に分布せしむべき、自然科学或は郷土博物館として、最も規範的なものといふべく、その創設、及び経営に対する好個の見本であり、博物館研究のよき対象である。此の程度の小地方博物館が、一刻も早く満洲の地方都市に実現するの日を希望して止まない。〔藤山 1940c : 183〕

先に見たように藤山は、国立中央博物館の新京本館にスミソニアン協会の国立自然科学博物館のような建築物を構想していた。しかし、大経路展示場の総床面積690㎡は、国立自然科学博物館の43,500㎡とあまりにも隔絶している。かくして、首都の中央博物館が、地方の小博物館のモデルとして出発する逆説的転倒となってゆくのである。

## 「第十二章 民俗博物館」

これは、満洲国国立中央博物館民俗展示場のことである。他の章の節がここでは項に対応し、その上位にタイトルを有した節を設けるという、本書のなかでは異なる構造を呈している。別の単独の原稿が、ここに挿入された印象を受ける。

まず、章の冒頭で民俗博物館に関する総論が展開される。これについては別稿〔大塚 1994、1996a、1996b〕の参照を希うが、ここでは章相互の関係から次の点に注意したい。第一は、「民俗」の範疇について「民俗学 Folk lore の民俗と大体同様の内容を有」すとする一方で、「独逸では自国の古俗研究を Volkskunde 他の異民族のものを Völkerkunde と用語まで区別してゐる」〔藤山 1940c : 185〕とドイツ語を参照する。先に見たベルリン国立民俗博物館の紹介と通じ合っていると思われる。また、「その構成は瑞典ストックホルム市の北方博物館のスカンセンに範を採」〔藤山 1940c : 187〕る旨の明記からは、他での例示とも相俟って民俗博物館の通奏低音としてスカンセンのあることが理解できる。さらに、行文では批判あるいは乗り越えの対象としているものの、「ドクトル・アルツール・ハゼリウスは北方博物館を構成するスカデナビアその他の夥しい民芸品の蒐集、保存、及び展示により、博物館に全く新生命を吹き込んだ」〔藤山 1940c : 188-9〕という評に、民俗博物館の端緒としての北方博物館が示されていると言ってよい。単調ではあったが、4章での

北方博物館紹介の所以も理解できるのである。

さて「本年八月より着工した」〔藤山 1940c : 184〕、つまり1940年8月20日に起工式をおこなったばかりの民俗博物館であり、本書の序が「二六〇〇（1940年—引用者注）、九、一」〔藤山 1940c : 2〕付であることからすれば、いまだ歴史も浅く展示も構想以上ではない状態での脱稿である。そのなかで「北満の代表的農家」は調査報告〔藤山 1940b〕の刊行も済ませ、執筆時点で着工済みの展示施設である。ロマノフカ村の調査もおこなわれているが、展示構想等の呈示にはいたっていない。「第三節鄂倫春及び赫哲族の民芸」でも博物館研究的な記述はない。民族の説明とその物質文化就中文様について詳述するが、この時点で藤山は、オロチョンやナーナイに接触した形跡は不明であり、その文物を通じて理解している様子がうかがえる。本書以降、民俗博物館に関する構想は詳細かつ冗舌に語られていくことになる。

### 「第十三章 満洲国の博物館」

5つの節から成り立つ。第1節は「奉天歴史博物館」のタイトルどおり、国立中央博物館奉天分館の沿革、建物、収蔵品に関する概説である。第2節の「国立中央博物館」は、官制施行以降大経路展示場開設以前の期間におこなった諸活動を「博物館エクステンション」とくくって記述する。博物館と学会・機関との連携について、スミソニアン協会を例示する。第3節は、現存のハルビン博物館、承德博物館や将来設置されるべき博物館の組織化すなわち中央集権化と、大経路展示場開設以前あるいは本来的な建物計画が披露される。そして、次の収蔵庫建設に関する外国の博物館への批判はやや異様である。

倉庫の建築及び設備については知見極めて狭く、且つ参考となるべきものが世界にも意外に少ない。例へば大英博物館の如き、旧套隋性により可及的に列品の展示量を大ならしめんとし、その収蔵設備には多くの工夫がめぐらされてゐない。ボストン美術館及び紐育メトロポリタン博物館等も地下室には各部の収蔵室を設備し、研究者にして特別閲覧を要求するものの入場を許してゐるが、まだ参考にするに足りるものがない。畢竟博物館即ち陳列館の隋性的通念より脱せるものないからである。〔藤山 1940c : 234〕

ここに掲げられた3館は、博物館紹介では定番と言うべき博物館である。しかし本書の章立てに、これらは用いられなかった。それは、こうした収蔵庫批判から来したものなのかもしれない。あるいは、それ以上の嫌悪が藤山にあったようにも思える。第4節は大経路展示場、第5節は民俗博物館で、多少の異同を含みながら、内容的にはそれぞれ第11章、第12章と重なる。

### 3-3 総論・結論を読みかえる

## 「第一章 博物館について」

ようやく第1章と第14章を検討するにまでいたった。第1章第1節の「文化縮図」は、「世界各国大都市の代表的博物館」を訪ねる「海外旅行者」の常を記し、これを端緒とする。大英博物館、ビクトリア&アルバート美術館の名が続くのも、端緒ゆえのことである。そして厭味を書きつけ、早速に「海外旅行者」の常識を転倒しにかかる。

こころみに大英博物館の東洋部を一巡すると、まだ世界が帆船時代、即ち近代文化の夜明前のどさくさに紛れ、よくもかう高貴にして、歴史的価値あるものを、日本その他の国々から、多数引つかき蒐めたものと驚嘆すると同時に、ゼントルマンを以て自任するアングロサクソンも、その国家的本性を赤裸々に曝露し、引いて今日世界の禍源をなせる英国なるものの正体を遺憾なく直視することが出来る。さうして英国が将来も亦如何に世界秩序を昏惑させる国家であるか、更に英国がどういふ破目から滅亡するに至るだらうかという想像もつくのである。〔藤山 1940c : 1-2〕

しかし、全否定しているわけではない。続いて「英国人はかゝる国家的施設或は社会教育機関により、その父祖以上に思ひきつた行動を敢へてする」〔藤山 1940c : 2〕と書く。すでに、シェークスピア博物館への賛辞も見てきたように、イギリスに対する藤山は複雑である。

「かと思ふと、一転して」〔藤山 1940c : 2〕と続け、イタリア、フランス、エジプト、ギリシャ、スウェーデン、オランダ、アメリカ、ドイツ等の博物館を足早に列記する。節末にいたり、ソ連の博物館を含む都市計画政策について字数多く投下した言及は、藤山が実見したわけではないものの、「恥づかしながら、その国都建設計画に博物館は勿論、図書館の如き、何一つ文化的施設が考量に入れられなかつたことは遺憾千万である」〔藤山 1940c : 5〕と満洲国批判に収斂する。

第2節「その使命」は、まずグランドキャニオンの小博物館を例示し、「実にこの小屋は実際と標本とそして理論とを総合して居る」〔藤山 1940c : 6〕と評す。グランドキャニオンの環境と相俟ったこの極小規模の博物館が、有効であることの意である。この主旨は、「博物館といふものの再認識を促す一存在」〔藤山 1940c : 6-7〕たるスウェーデンのスカンセンの例示によってさらに拡大される。

途上、「東京の○○博物館」への批判と「隣の動物園」への肯定が挿入されている。

何千万円もかかつたあの宏壮な博物館のあらゆる機能をもつてしてそれらの生徒達に一つの組織を持つた世界を提供し得なかつたのに反し、動物園の一疋の猿の生態は彼等に「未だ知られざる宇宙」を創造して見せたのである。〔藤山 1940c : 7〕

昭和13年（1938）に復興本館開館を果たした東京帝室博物館と上野動物園とを対照して

おこなわれているのは、「博物館は静態的でもあるが、又動態でなければならんこと」〔藤山 1940c : 9〕の示唆である。スカンセンは「動態」においても評価されていたわけである。

ところで、帝室博物館に対する藤山一雄の批判はこれにとどまらない。「新博物館の胎動」〔藤山 1940a〕では次のように展開される。大英博物館に対するのと同様、藤山の博物館論構築に際した戦略敵のごとき役割をになわせている印象がある。

新建築が余り立派すぎ、反つて国宝的内容も瘠せて見えます。勿論暇に任せてゆつくり見れば、立派な列品もあることだし、いろいろ教示され、暗示を受けることかとも思ひましたが、素通りしてゆく普通の観覧者には、何等の学問的な感銘も与へぬだらうと思はれます。只以前に比して列品の数を少くして、焦々した感じを与へない点、ぜいたく過ぎる程に注意深く設備された採光や換気、温湿度適正装置等はかなり念入りに出来てゐる様であります、然しこれだけ多数の金を使つて居て、現実の国民生活に如何なる効果を与へ得るか疑問であります、また博物館の概念を歪めさせるのではないかとも思ひます。〔藤山 1940a : 3-4〕

巨大で権力的な博物館に対する反発が、藤山にはあったのだろう。帝室博物館の復興本館は日本の博物館建築としては当時最新であり、第10章でアメリカの自然科学博物館にしたように、これを参照してもよいはずである。確かに帝室博物館の博物館建築を否定することはないが、「現実の国民生活に如何なる効果を与へ得るか疑問であります、また博物館の概念を歪めさせるのではないかとも思ひます」と軸をずらして批判する。大英博物館、帝室博物館への評価を過小にする一方で、たとえばグランドキャニオンの小博物館をクローズアップする手法にも、この印象は生じるのである。

第3節「その対象」と第4節とは一連である。世界の博物館発達史を概観し「研究を目的にするか、一般民衆の教導を主にするかといふことは考慮する必要がある」〔藤山 1940c : 10〕ことを説きつつ、「その境界は判つきりせず、只その傾向の濃度により特色づけらるゝばかり」〔藤山 1940c : 11〕とする。その上で、満洲国の博物館の当事主体たる藤山は、「自然科学方面に於ては「明日」のために青少年を対象として浅く、広く、科学に対する興味を刺戟し、これを生活せしめるやう努力する経営方法を取り、人文科学方面に於ては反対に過去に遡及し、満洲ひいては極東アジアを揺籃として興廃せる民族文化の根元を極め、その文化史を考古資料によつて基礎づけ、系統化するため、その活動を深く専門的ならしめる」〔藤山 1940c : 13-4〕として、自然科学分野を教育、人文科学分野を研究とした布置関係を措定する。

第5節「外に働く」とは、「博物館エクステンション」の意である。藤山にとっては、博物館の教育と研究を総括する概念として用いられている。「米国はこの博物館エクステンションを最も合理的に行」〔藤山 1940c : 15〕うとして参照の中心を示すが、そもそもMuseum Extensionは、大恐慌以後のアメリカの博物館経営策であった。ニューヨーク自然史博物館、

メトロポリタン美術館の活動を例示するが、これらに「丁抹に於ける農村へのトラベリングレクチュア」や「近代までの富山の売薬業者や、近江商人の活動」、「最近に於ける大都市デパートメントストアの通信販売、某々私立大学の通信教授」〔藤山 1940c : 17〕に置換させるのは、アメリカの博物館運動に対する相対化の念が藤山にあったからなのかもしれない。

第6節「近代博物館の進路」とは、満洲国国立中央博物館の進路の意である。自然科学分野と人文科学分野とに分けて言い及ぶが、「科学殊に自然科学に関する列品の組合せ、その指導法は丁抹の科学者ラクール立案に係るアスコフ国民高等学校方式によりたい」〔藤山 1940c : 18〕として、科学の論理性に歴史性を導入する。一方人文科学分野、就中歴史分野については、「企画ある配列構成」〔藤山 1940c : 20〕という論理性を導入することを打ち出す。両者を体系的に総合するのが、満洲国国立中央博物館となる。

#### 「第一四章 結語」

結論は、次の一文に集約される。

私は博物館工作を余り大規模に考へず、生活の様式（文化）を、此の満洲でいへば大陸の自然に即応させ、最も合理化し、科学化すると同時に、機械化しないで、合理化しても味があり、色気のある、つまり品位のあるものにさせたい。これを目標にしてその施設の万全を期するのである。〔藤山 1940c : 245〕

藤山一雄は、合理主義および科学主義と、反機械主義とを総合するものとして、博物館を構想する。藤山の所論の特質は、反機械主義が反科学主義ではないところにある。

#### 4 『新博物館態勢』の構造

以上、全14章にわたり見來た。本書第2章から第10章で取り上げられた博物館は、次の4つのグループにまとめることができる。

- A : ゲーテ博物館、シェークスピア博物館。博物館分類的には、「英雄偉人の一生を偲ぶ資料を展示せる特殊博物館」〔藤山 1940c : 4〕であり、「浪漫的」に記された一群と考えられる。
- B : ベルリン国立民俗博物館、北方博物館、慶州博物館、日本民芸館。ベルリン国立民俗博物館と北方博物館は、「民俗」あるいは「民族」の範疇の展示資料の参照として共通し、慶州博物館と日本民芸館は「民俗」およびスカンセンにおいて通じ合う。総じて、「民俗」の外延に位置する一群である。
- C : エジプト博物館。他の3グループのいずれにも積極的に属する印象がない。単独で1グループと仮に考えておきたい。
- D : フランスの国立博物館、北米合衆国国立博物館。「どんな仕組に出来てゐるか、どんな

方法で展示されてゐるか」および「構造的」「スペースの分配」において参照されている一群である。

あらためてこれらを鳥瞰すると、ほとんどが人文科学分野の博物館であることに気づく。第1・11・13・14章で、自然科学分野と人文科学分野の双方に言及していたのとは異なりを見せる。藤山の関心の中心は、人文科学分野の博物館にあった。副館長としての藤山は双方を配慮し、個人の藤山としては人文科学分野に傾注し、そのことが人文科学部長兼務にいたせよといえる。その上で、まずBは藤山の民俗博物館に連なる一群とみなしてよい。Dは、博物館の近代的構成にのみ藤山の参照項がある。

Cの理解には、章を横断した考察が必要となる。エジプト考古博物館の展示品に接して、藤山が「驚」の字を含む語を連ねた所以は何だったのであろうか。藤山は「エジプト博物館は実に是等古代エジプト文化の縮図であると同時に「魂の墓場」といつてもよい」〔藤山 1940c : 101-2〕と書いていた。「文化の縮図」とは、第1章第1節に「博物館がその国々の「文化の縮図」であつて」〔藤山 1940c : 1〕とあるように、博物館と同義である。では「魂の墓場」とは何か。「魂」の語に注目するとき、「古きを温ね、将来を創造する魂の工場でなければならないのである」〔藤山 1940c : 9〕にそれを見いだすことができる。この文脈では、博物館が「動態」であるべきことの意であり、それは「工場」の語にかかると思なせる。となると「墓場」の語は、「静態」の意として理解することができるだろう。そこで問題となるのは、「博物館は静態的でもあるが、又動態でなければならん」〔藤山 1940c : 9〕としていた藤山が、なぜ「静態的」な「魂の墓場」であるエジプト考古博物館に驚喜した様子を、これほどまでに書き連ねなければならなかったのか、である。

これら驚喜する様子は、直接には博物館人としてのそれではない。博物館当事主体としての発言ではなく、藤山一雄個人のそれである。惟うにエジプト考古博物館の紹介は、「静態的」な「魂の墓場」も「動態」となり得るモデルの呈示だったのではないだろうか。それを、藤山自らが実演してみせたのではないか、と思うのである。この傾向はゲーテ博物館、シェークスピア博物館、慶州博物館、日本民芸館にも看取できるところであり、概して第2章より進みエジプト考古博物館でピークを迎えるという構成だったことも考えられる。

## 5 私たちにとっての『新博物館態勢』

このように藤山一雄をとらえて離さなかった博物館は、こんにちの私たちにとっていったい何なのであろうか。

私たちを規定する戦後の博物館は、機能主義によって理論づけられ活動が進められてきた。これをもとに読みかえせば、まずDが機能主義の一分野に属することは疑いない。またBは、民俗博物館および野外民俗博物館に連なる。ただし、野外博物館自体「第二次世界大戦以後全く新しい考え方のもとで新設されたもの」〔鶴田 1960 : 35〕として、戦後の側から断絶された経緯をもつ。あらためて、この歴史なき機能主義の言説を断罪しておこう。

藤山一雄の博物館は、機能主義を含みながら、機能主義でないものを大いに含んでいた。これは、「最も合理化し、科学化すると同時に、機械化しないで、合理化しても味があり、色気のある、つまり品位のあるもの」〔藤山 1940c : 245〕に対応する。「合理化」「科学化」が機能主義、「味があり、色気のある、つまり品位のあるもの」が機能主義でないものの意となる。

ゲーテ博物館を想起しよう。それは、「芸術、科学のあらゆる分野に互れる」〔藤山 1940c : 40〕ことにおいて参照されていた。ゲーテ博物館が本書の冒頭に排せられたことの意味が、ここにいたって鮮明となる。あるいは藤山は、自身にゲーテを投影していたのではないかとも思えてくるのである。そして、ピークとしたCの直後、Dの直前というシェークスピア博物館の配置も、本書のはじまりを告げたゲーテ博物館に対して、終わりを画するものだったことに思いつく。かくして、B・CのメタレベルとしてのAという理解が可能となる。A〔B・C〕が藤山の博物館の要諦であり、Dがその属性だったのである（図）。

端緒において、博物館の論理性を自然科学分野に、博物館の歴史性を人文科学分野に、それぞれ位置付け、その体系的総合を民俗博物館で企図するのが藤山の博物館論であった。「自らの世界観と文明的要素を盛れる自己の生活の帰趨を暗示せるもので、一つの芸術的創造なり」〔執筆者不明 1940〕や、「民俗研究、その資料の蒐集、更にその展示はわが国立中央博物館構成の一分科に過ぎないが、然し更によく考へるとそれは博物館活動の総合であるともいへる」〔藤山 1942 : 5〕をも参照すれば、この理解はさらに首肯されるであろう。

藤山一雄の博物館論を、藤山の用語を借用し「生活芸術の博物館」と名づけ、向後の作業に具えるものである。

---

注 引用文は、旧字体の新字体への改変にとどめ、かなづかい、促音便、句読点、地名、誤脱字の表記は原文のままとした。

## 謝辞

本稿は、多くの方に支えられて成立している。記して衷心感謝申し上げる。（順不同、敬称略）

藤山光太郎、藤山多美子、藤山浩一郎、藤山雄治郎、藤山信子、佐藤睦子（梅光学院大学博物館）。

## 《参考文献》

藤山一雄

- 1940a 「新博物館の胎動」『民生』第3巻第1号：1-8、発行者不明
- 1940b 『ある北満の農家』満洲民俗図録第1集、満日文化協会
- 1940c 『新博物館態勢』東方国民文庫23、満日文化協会
- 1941 『ロマノフカ村』満洲民俗図録第2集、満日文化協会
- 1942 「“ある北満の農家”のこと（三度民俗博物館について）」『国立中央博物館時報』第15号：1-5、満洲国国立中央博物館
- 1990 『新博物館態勢』伊藤寿朗監修『博物館基本文献集』第4巻、大空社

後藤守一

- 1931 『欧米博物館の施設』、帝室博物館

浜田青陵

- 1929 『博物館』、アルス

犬塚康博

- 1994 「藤山一雄と満洲国の民俗博物館」『名古屋市博物館研究紀要』第17巻：75-96、名古屋市博物館
- 1996a 「君知るや満洲国の民俗博物館をI 満洲国国立中央博物館民俗展示場のドキュメント抄」『歴史民俗学』4号：215-35、批評社
- 1996b 「君知るや満洲国の民俗博物館をII 藤山一雄の民俗博物館論」『歴史民俗学』5号：243-61、批評社

木場一夫

- 1949 『新しい博物館 その機能と教育活動』、日本教育出版社

日本博物館協会

- 1956 『博物館学入門』、理想社

執筆者不明

- 1940 （広告）「新博物館態勢 藤山一雄著」『国立中央博物館時報』第8号：裏表紙裏、国立中央博物館

棚橋源太郎

- 1930 『眼に訴へる教育機関』、宝文館

鶴田総一郎

- 1960 「日本の博物館の状況について」『博物館研究』第33巻第12号：32-9、日本博物館協会



表 『新博物館態勢』の章・節・図版

| 章・節             |  | 図版                                                                         | 頁数                 |
|-----------------|--|----------------------------------------------------------------------------|--------------------|
| 第一章 博物館について     |  |                                                                            |                    |
| 一、文化縮図          |  | カイゼル・フリードリヒ博物館と大英博物館〔一、カイゼル・フリードリヒ博物館と大英博物館〕                               | 1-20<br>(1-5)      |
| 二、その使命          |  | 〔二、カイゼル・フリードリヒ博物館のプラン〕                                                     | (5-9)              |
| 三、その対象          |  |                                                                            | (9-12)             |
| 四、死せる列品を生かす     |  |                                                                            | (12-14)            |
| 五、外に働く          |  |                                                                            | (15-17)            |
| 六、近代博物館の進路      |  |                                                                            | (17-20)            |
| 第二章 ゲーテ博物館      |  |                                                                            | 21-40              |
| 一               |  | 〔三、ゲーテの家の紋章〕                                                               | (21-29)            |
|                 |  | 〔四、ゲーテ博物館とガルテンハウス<br>右 シルレル/左 ゲーテ 静なるワイマールの町〔五、ワイマールの町とゲーテとシルレルの銅像〕        |                    |
| 二               |  | 〔六、ゲーテ博物館平面図<br>ゲーテの倚りて死せる椅子。〔七、ゲーテ臨終の部屋〕                                  | (29-31)            |
| 三               |  |                                                                            | (31-39)            |
| 四               |  |                                                                            | (39-40)            |
| 第三章 ベルリン国立民俗博物館 |  |                                                                            | 41-56              |
| 第一民俗博物館         |  | 〔八、ベルリン民俗博物館<br>ベルリン民俗博物館平面図〔九、ベルリン民俗博物館のプラン〕                              | (41-42)<br>(42-52) |
| 第二民俗博物館         |  |                                                                            | (52-56)            |
| 第四章 北方博物館       |  |                                                                            | 57-74              |
|                 |  | 〔一〇、〕北方博物館〔の景観〕<br>北方博物館平面図〔一一、同 平面図〕                                      |                    |
| 第五章 慶州博物館       |  |                                                                            | 75-83              |
| 一               |  | 慶州博物館応接室の構造美（著者筆）〔一二、慶州博物館応接室の構造美〕<br>慶州博物館〔一三、同 本館〕<br>慶州博物館平面図〔一四、同 プラン〕 | (75-78)            |
| 二               |  |                                                                            | (78-80)            |
| 三               |  |                                                                            | (80-83)            |
| 第六章 日本民芸館       |  |                                                                            | 85-98              |
| 一               |  |                                                                            | (85-87)            |

|                           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |           |
|---------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| 二                         | 〔一五、〕 日本民芸館<br>日本民芸館平面図〔一六、同 プラン〕<br>I 日本民芸館露出展示方法〔一七、同 露出展示法 I〕<br>II 日本民芸館露出展示方法〔一八、同 II〕                                                                                                                                                                                                          | (87-89)   |
| 三                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | (90-93)   |
| 四                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | (93-96)   |
| 五                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | (96-98)   |
| 第七章 エザブト博物館               |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 99-112    |
| 一                         | 〔一九、〕 エザブト博物館<br>〔二〇、〕 ツータン・カーメンの家具と女王タイアの父のミイラ                                                                                                                                                                                                                                                      | (99-103)  |
| 二                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | (103-107) |
| 三                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | (107-112) |
| 第八章 シェークスピア博物館            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 113-125   |
| 一                         | STRATFORD-UPON-AVON IN THE TIME OF SHAKESPEARE〔二一、<br>シェークスピア在世当時のスーラーホードオンアボンの地図〕<br>アボンの流とシェークスピア博物館〔二二、アボンの流とシェークスピア<br>博物館〕<br>シェークスピアの少年時代使用せる机とシェークスピア博物館の内部〔二<br>三、シェークスピアの少年時代使用せる机とその博物館展示内部〕<br>平面図〔二四、同 博物館プラン〕<br>シェークスピアの墓碑銘と妻の里方の玄関口〔二五、シェークスピア墓碑<br>銘と妻の里方の玄関口〕<br>〔二六、〕 トリニチ教会の大扉の引金 | (113-119) |
| 二                         |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | (119-125) |
| 第九章 フランスの国立博物館〔フランス国立博物館〕 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 127-133   |
| 第一〇章 北米合衆国国立博物館           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 135-160   |
| 一、スミソニアン協会設立の沿革           | (スミソニアン協会のロゴマーク)                                                                                                                                                                                                                                                                                     | (135-138) |
| 二、スミソニアン学会の構成             | 〔二九、〕 ワシントン市中心部に於ける博物館の位置<br>〔三〇、〕 ワシントン国立博物館切断図<br>〔二七、〕 ワシントン国立博物館<br>人類学展示室(第一階陳列)〔二八、人類学展示室〕<br>ワシントン国立博物館姿態(上北面、下南面)〔三一、ワシントン国立博<br>物館姿態〕                                                                                                                                                       | (138-143) |
| 三、新博物館の内蔵                 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | (143-148) |
| 一、本館の利用面積                 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | (148-150) |
| 二、階によるスペースの分配             | ワシントン国立博物館平面図(第一階)〔三二、同 第一階のプラン〕                                                                                                                                                                                                                                                                     | (150-155) |
| 三、主題によるスペースの分配            |                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | (155-160) |

|     |                      |                                                                          |           |
|-----|----------------------|--------------------------------------------------------------------------|-----------|
| 第一章 | 国立中央博物館大経路展示場        |                                                                          | 161-183   |
| 一   |                      | 〔三三〕大経路展示場のプラン                                                           | (161-164) |
| 二   |                      | 大経路展示場開場当日記念〔三四、同 開場式当日の記念撮影〕<br>大経路展示場の一部〔三五、同 展示場の一部〕<br>〔三六、同 入場券の種々〕 | (164-168) |
| 三   |                      |                                                                          | (169-183) |
| 第二章 | 民俗博物館について            |                                                                          | 184-220   |
|     |                      |                                                                          | (184-189) |
| 第一節 | 北満の代表的農家〔ある北満の代表的農家〕 |                                                                          |           |
| 一   |                      |                                                                          | (189-190) |
| 二   |                      |                                                                          | (190-192) |
| 三   |                      |                                                                          | (192-193) |
| 四   |                      |                                                                          | (193-194) |
| 五   |                      |                                                                          | (194-195) |
| 六   |                      |                                                                          | (195-196) |
| 第二節 | ロマノフカ村に就て〔ロマノフカ村の生活〕 |                                                                          |           |
| 一   | その鳥瞰図                |                                                                          | (197-199) |
| 二   | 禁欲的信仰                |                                                                          | (199-201) |
| 三   | 楽しき木造要塞              |                                                                          | (201-207) |
| 四   | 黒パンと馬鈴薯              |                                                                          | (207-210) |
| 五   | 美しきマフラと襲深きスカート       |                                                                          | (211-212) |
| 六   | 衛生と教育                |                                                                          | (212-213) |
| 第三節 | 鄂倫春〔〕及び赫哲族の民芸        |                                                                          |           |
| 一   |                      |                                                                          | (214-216) |
| 二   |                      | I ゴルド族の民芸品文様〔三七、ゴルド族の民芸品文様 I〕<br>II ゴルド族の民芸品文様〔三八、同 II〕                  | (216-220) |
| 第三章 | 満洲国の博物館              |                                                                          | 221-242   |
| 一   | 奉天歴史博物館              |                                                                          | (221-228) |
| 二   | 国立中央博物館              |                                                                          | (228-231) |
| 三   |                      |                                                                          | (231-236) |
| 四   |                      |                                                                          | (236-239) |
| 五   |                      |                                                                          | (239-242) |
| 第四章 | 結語                   |                                                                          | 243-246   |

注 目次と本文のタイトルに異同がある。本表は本文のタイトルにしたがい、目次のタイトルが異なる場合は〔〕内に記した。本文、目次ともにタイトルのない図版については、（）内に任意にタイトルを記した。

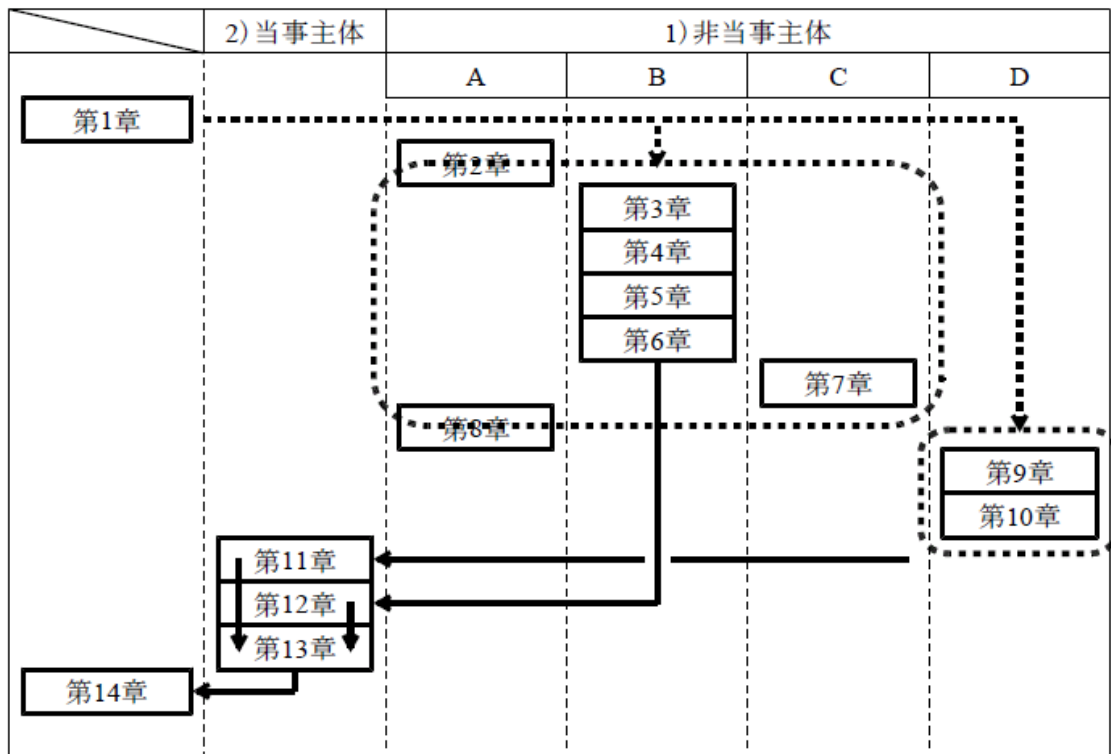


図 『新博物館態勢』の章の関係と構造